

## 同志社大学文化情報学部蔵『源氏絵所屏風言葉書』翻刻と考察（匂宮巻／夢浮橋巻）

福田 智子・松本 尋 弥・小原 菜々子・関 あかり・薛 堰 之

『源氏絵師屏風言葉書』は、江戸時代中期写とされる卷子本である。『源氏物語』五十四帖の本文を、一帖につき一箇所ずつ抜き書きしたもので、これに対応する源氏絵を屏風に描く目的で作成されたものと推察される。本稿は、同志社大学文化情報学部蔵『源氏絵所屏風言葉書』翻刻と考察（桐壺巻／野分巻）、「同（御幸巻／幻巻）」に引き続き、匂宮巻から夢浮橋巻の本文と、それが指し示す源氏絵の図柄を考察するものである。

## 凡例

- 一、冒頭に、巻の通し番号と巻名を示す。
  - 一、翻刻本文は、漢字・仮名ともに通行の字体を用いるが、できる限り本書の原態を尊重する。
  - 1、仮名遣い・反復記号・送り仮名は、底本のままとする。
  - 2、濁点や句読点は付さない。
  - 3、改行や字下げなどは、可能な限り原本の字の配置を生かす。
- 一、校異は、表記の相違は示さず、語の異なりのみを示す。異同箇所は「絵所」本文の行数を付して挙げる。
- 【校異1】北村季吟『湖月抄』（延宝三年（一六七五）刊）本文との比

較を行う。『湖月抄』のテキストは、『源氏物語湖月抄（中）増注』『源氏物語湖月抄（下）増注』（北村季吟著・有川武彦校訂、講談社学術文庫315・316、一九八二年五月）に拠り、「絵所」の該当箇所を、中（あるいは下）一頁一行（本文の行数）と記す。また、異同箇所は「絵所本文↑↓湖月抄本文」の順に示す。

【校異2】『源氏物語大成』（中央公論社、一九八九年八月普及版再版。略称「大成」）に拠り、「絵所」の該当箇所を、巻数一頁（底本の名称）と記す。

「絵所」の「大成」底本との異同箇所について、「絵所」本文と一致する伝本がある場合には、「Ⅱ」を用いて、その伝本の名称を本文系統の略号とともに記す。

- ・青表紙本系統 〈青〉
- ・河内本系統 〈河〉
- ・別本 〈別〉

次に、異同箇所を、「絵所本文」→「大成底本文」の順に示す。  
最後に、「絵所」と全文が一致する伝本を、系統の略号とともに※を付して挙げる。

一、「絵所」本文の『源氏物語』における【該当箇所】を示す。角川古典大観『源氏物語』CDROMに拠り、その箇所を含む節の見出しを挙げるとともに、同CDROMの「参考情報」機能を用いて、以下の校訂本文の該当巻数・頁数を列挙する。

- ・日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店） 略称「大系」
- ・新日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店） 略称「新大系」
- ・日本古典文学全集『源氏物語』（小学館） 略称「全集」
- ・新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館） 略称「新全集」
- ・新潮日本古典集成『源氏物語』（新潮社） 略称「集成」
- ・角川文庫『源氏物語』（角川書店） 略称「文庫」
- ・玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店） 略称「評釈」

なお、見出しは、必ずしも「絵所」の本文を過不足なく説明するものではない。

#### 四二 にはふ宮

##### 【翻字】

おまへの前裁にも春は梅の花園をなかも秋は世  
の人のめつる女郎花さをしかのつまにすめる萩  
の露にもおさく御心をうつし給はず老をわする、

きくにおとろへゆくふちはかまものけなきわれもかう  
などとはいとすさまじき霜枯の比ほひまておほし

すてすなとわさとめきてかめにめつるおもひをなんとた  
て、このましようおはしける

【校異1】「湖月抄」下 218-9 / 「1」なかめ↕ながめ給ひ、  
「3」御心を↕御心

【校異2】「大成」5-1436（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「1」なかめ↕なかめ給 「3」御心を↕御心 ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「8」薫への対抗心から匂宮は薫物を好む、二人の評判の高  
さ、匂宮は冷泉院の女の宮を慕う「大系」4-226、「新大系」4-  
219、「全集」5-21、「新全集」5-27、「集成」6-171、「文庫」8-32、「評  
釈」9-227

#### 四三 紅梅

##### 【翻字】

心ありて風のにほはす園の梅にまつうくひすの  
とはすやあるへきとくれなるの紙にわかやきかきて  
この君のふところかみにとりませをした、みて出し  
たて給をおさなき心にいとなれきこえまほしと思へはい  
そきまいりぬ

【校異1】「湖月抄」下 238-4 / 「5」まいりぬ↕まゐり給ひぬ

【校異2】「大成」5-1454（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「5」まいりぬ〓〈別〉保坂本・国冬本・飯島本↕まいりたまひぬ

※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「6」大納言は匂宮に中の君との結びつきを願って梅を若君に持って行かせる 「大系」4-243、「新大系」4-239、「全集」5-43、「新全集」5-49、「集成」6-190、「文庫」8-46、「評釈」9-269

四四 たけかは

【翻字】

しはし

わたとの、戸口に・ゐてこゑき、しりたる人に物  
などの給一夜の月影ははしたなかりしわさかな

藏人少将のつきの光にか、やきたりし

けしきもかつらのかけにはつるにはあら

すや有けん雲のうへちかくてはさしもみえ

さりきなとかたり給へは人く哀と聞もありやみ

はあやなきを月にはへ今すこし心ことなりと

きこえしなとすかしてうちより

竹河のその夜のことはおもひいつや忍ふ

はかりのふしはなけれど

【校異1】「湖月抄」下-287-12 / 「7」月にはへ → 月ばえ

【校異2】「大成」5-1490 (底本…大島本 飛鳥井雅康筆)

「7」月にはへ ≪青≫ 肖柏本 → 月はえは 「8」きこえし → さため

きこえし ※全文一致伝本…なし。

【該当箇所】「20」翌日冷泉院は薫を召し、昨夜の踏歌を称賛、源氏をまねて女楽を催す 「大成」5-1490、「大系」4-282、「新大系」4-280、「全

集」5-91、「新全集」5-98、「集成」6-236、「文庫」8-81、「評釈」9-380

四五 橋姫

【翻字】

すいかいの戸をすこしをしあけて見給へは月おかし

きほとに霧わたれるをなかめてすたれをみしかく

まきあけて人くゝゐたりすのこにいとさむけに身

ほそくなへはめるわらはひとりおなしさまなるおとな

なとゐたりうちなるひと独ははしらにすこしゐかくれ

てひはをまへにをきて撥を手まさくりにしつゝゐ

たるに雲隠たるつる月にはかにいとあかくさし出た

れはあふきならてこれしても月はまねきつへかりけり

とてさしのそきたるかほいみしくらうたけに

にほひやかなるへしそひふしたる人はことのうへにか

たふきかゝりて入日を返すはちこそ有けれさま

ことにも思ひをよひ給御心かなとてうちわらひたる

けはひ今すこしをもちかによしつきたり

【校異1】「湖月抄」下-328-6 / 「2」すたれをみしかく → すだれを

すこしみじかく

【校異2】「大成」5-1522 (底本…大島本 飛鳥井雅康筆)

「5」独は ≪青≫ 池田本・肖柏本・三條西家本、(河) 全て (御物本・

七毫源氏・尾州家本・為家本・平瀬本・大島本・鳳来寺本)、(別) 高松

宮家本・保坂本・国冬本・麦生本・阿里莫本 → 一人 ※全文一致伝本…

〈青〉肖柏本、〈河〉尾州家本・大島本・鳳来寺本

四七 総角

【該当箇所】「12」薫は大君、中の君の姿をかいま見る、応対する女房もいなくて困惑 「大成」5-1522、「大系」4-314、「新大系」4-314、「全集」5-131、「新全集」5-139、「集成」6-275、「文庫」8-110、「評釈」10-87

四六 しゐか本

【翻字】

なみたのみ霧ふたかれる山さとはまかきに  
鹿そもろこゑになくくろき紙に夜のすみつき  
もたとくしければひきつくるふ所もなく筆  
にまかせてをしつゝみて出し給つ御つかひは木  
幡山のほとも雨もよにいとおそろしけなれとさや  
うのものをちすましきをえり出給けんむ  
つかしけなるさゝのくまをこまひきとゝむ  
るほともなくうちはやめてかたときにまいり  
つきぬ

【校異1】「湖月抄」下-382-9／異同なし

【校異2】「大成」5-1564（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「6」すましきを↑すましきをや ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「15」匂宮は翌朝返事、大君は父の遺言もあり山住みで過すことを思う 「大系」4-358、「新大系」4-358、「全集」5-185、「新全集」5-194、「集成」6-328、「文庫」8-150、「評釈」10-236

【翻字】  
暁の別やまたしらぬことにてけに  
まとひぬへきを歎かちなり庭鳥もいつ  
かたにかあらんほのかにをとなふに京おもひ  
いてらる

山さとのあはれしらるゝこゑくにとりあ  
つめたるあさほらかな女君  
とりの音もきこえぬやまとおもひしを世に  
うきことはたつねきにけり

【校異1】「湖月抄」下-426-2／「2」まとひぬへきを↑まとひぬへきをと 「2」歎かちなり↑なげきがちなりる

【校異2】「大成」5-1598（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「2」まとひぬへきを↑まとひぬへきをと 「7」世に↑世のの（参考）  
「よに」（湖月抄） ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「7」薫は何ごともなく大君と一夜を過し、夜明けの空を眺め、暁に別れる 「大系」4-394、「新大系」4-394、「全集」5-229、「新全集」5-239、「集成」7-26、「文庫」8-181、「評釈」10-336

四八 早蕨

【翻字】

あさりのもとより年あらたまりては何事かおはしま  
すらん御祈はたゆみなくつかうまつり侍り今はひ  
と所の御ことをなんやすからすねんしきこえさする

なときこえてわらひつくくしおかしき籠に入て

これはわらはへのくやうして侍るはつをなりとてたて

まつれり手はいとあしうてうたはわさとかましくひ

きはなちてそかきける

きみにとてあまたの

春をつみしかはつねをわすれぬ

はつわらひなり

御前よみ申さしめ給へとあり

【校異1】「湖月抄」下1526-9 / 「7」かきける↑↓かきたる

【校異2】「大成」5-1677 (底本・定家本 藤原定家筆)

「7」かきける↑↓かきたる ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「2」阿闍梨から新年のあいさつと蕨など、中の君の返歌、

薫の悲嘆のさま 「大系」5-11、「新大系」5-4、「全集」5-336、「新

全集」5-346、「集成」7-125、「文庫」9-19、「評釈」11-25

四九 やとり木

【翻字】

やとりきと思ひいてすはこのもとの旅ねもいかに

さひしからましと独こち給をきゝてあま君

あれはつる朽木のもとをやとりきとおもひをき

けるほとのかなしさ

【校異1】「湖月抄」下639-7 / 異同なし

【校異2】「大成」6-1764 (底本・大島本 飛鳥井雅康筆)

異同なし ※全文一致伝本…(青) 大島本 (底本)・横山本・池田本・肖

柏本・三條西家本、(河) 御物本・七毫源氏・尾州家本・平瀬本・鳳来

寺本・大島本、(別) 高松宮家本・陽明家本・保坂本・阿里莫本・桃園

文庫蔵本

【該当箇所】「37」薫は弁の尼から浮舟の素姓や生い立ちを聞き、仲介を

求め、翌朝帰京 「大系」5-101、「新大系」5-92、「全集」5-450、「新

全集」5-462、「集成」7-234、「文庫」9-102、「評釈」11-236

五〇 あつまや

【翻字】

佐野、わたりに家もあらなくなるとくちすさひて

さとひたるすのこのはしつかたにみ給へり

さしとむるむくらやしけきあつまやのあまり

ほとふる雨そ、きかなとうちわらひ給へるをひ風

いとかたわなるまであつまのさと人もおとろきぬ

へし

【校異1】「湖月抄」下746-10 / 「4」うちわらひ↑↓うちはらひ

【校異2】「大成」6-1845 (底本・大島本 飛鳥井雅康筆)

「4」うちわらひ〓(河) 前田家本、(別) 御物本・高松宮家本・池田本・

国冬本↑↓うちはらひ ※全文一致伝本…(河) 前田家本

【該当箇所】「31」女二の宮と親しまない薫、弁の君は浮舟のもとを訪れ

る 「大系」5-190、「新大系」5-177、「全集」6-84、「新全集」6

-91、「集成」7-336、「文庫」9-181、「評釈」11-444

五一 うき船

【翻字】

山かつのかきねのおとろむくらのかけに

あふりといふものをしきておろしたてまつる

我御心ちにもあやしきありさまかなかゝる

みちにそこなはれてはかしくしくはえある

ましき身なめりとおほしつゝくるになき

給ことかきりなし

【校異1】「湖月抄」下1841-8/異同なし

【校異2】「大成」6-1921（底本・池田本 伝二條為明筆）

異同なし ※全文一致伝本…（青）池田本（底本）・横山本・平瀬本・肖

柏本・三條西家本

【該当箇所】「37」警備の嚴重さ、時方は右近と会い、侍従を連れて匂宮

に説明させる 「大系」5-270、「新大系」5-253、「全集」6-182、「新

全集」6-190、「集成」8-91、「文庫」10-78、「評釈」12-173

五二 かけろふ

【翻字】

あやしうつらかりけるちきりともをつくくとお

もひつゝけななめ給ゆふくれかけろふの物はかなけに

とひちかふを

ありとみて手にはとられす見ればまたゆくゑ

もしらすきえしかけるふあるかなきかのとれい

のひとりこち給とかや

【校異1】「湖月抄」下922-5/異同なし

【校異2】「大成」6-1984（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

異同なし ※全文一致伝本…（青）大島本（底本）

【該当箇所】「35」宮の君に比べ、大君、中の君の難点のなさを思い、浮

舟の運命を悲しむ 「大系」5-335、「新大系」5-317、「全集」6-264、「新

全集」6-275、「集成」8-170、「文庫」10-137、「評釈」12-333

五三 手習

【翻字】

むかしの山さよりは水の音もなこやかなりつくり

さまゆへある所のこたちおもしろく前裁な

ともおかしくゆへをつくしたり秋に成行は

空のけしきもあはれなるを門田のいねかる

とて所につけたるものまねひしつゝわかき女

ともはうたうたひけうしあへりひた引ならず

をともおかしく見しあつま路などのことなとも

おもひいてられてかの夕霧の宮す所のおは<sup>せ</sup>し

山さよりは今すこしいりて山にかたかけたる

家なれば松かけしけくかせの音もいと心ほそ

きにつれくゝとをこなひをのみしつゝいつと

なくしめりやかなり

【校異1】「湖月抄」下946-6/「12」しめりやかなり↕しめやかな

り

【校異2】「大成」6-2004（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）



## 考察

まず、本稿で取り上げた匂宮から夢浮橋の十三帖について、「絵所」と『湖月抄』との本文比較を通覧してみよう。江戸時代中期写と見られる「絵所」は、『湖月抄』を参照した可能性がある。はたして、「絵所」と『湖月抄』の本文が一致するのは、「四六 しるか本」「四九 やとり木」「五一 うき船」「五二 かけろふ」の四帖である。このうち、「四九 やとり木」は、「大成」所収本のうち、別本の国冬本以外の伝本と全文が一致する。また、「五一 うき船」も、青表紙本系統の池田本・横山本・平瀬本・肖柏本・三條西家本と全文一致、また、「五二 かけろふ」も、同じく青表紙本系統の大島本と全文が一致する。従って、これら三帖の「絵所」本文は、『湖月抄』と一致するとはいえ、直接的な影響関係を指摘するのは難しいであろう。一方、「四六 しるか本」は、「絵所」と『湖月抄』がもつ「すましきを」の本文を、「大成」所収本に見出すことができず（諸本「すましきをや」、わずか助詞一文字の異同ではあるが、「絵所」と『湖月抄』との本文の近さが垣間見える。

なお、「四七 総角」には、「絵所」と『湖月抄』では一致するが、他の『源氏物語』諸本には見出されない本文がある。

## 四七 総角

【校異2】「7」世に↑↓世の（参考）「よに」<sup>の異</sup>（湖月抄）

『源氏物語』の本文として有力な「世の」に対し、「絵所」は「世に」であり、『湖月抄』もまた、「の」の異文傍書を有しながらも、「よに」の

本文を持つことには留意される。

それでは、『湖月抄』との異文が生じている「絵所」の残り九帖について、当該箇所「絵所」の本文は、「大成」所収本文の中に見出すことができるのであろうか。まず注意されるのは、それらの「絵所」の本文が「大成」所収本文にも見出されない、いわゆる独自異文である。「四二 にほふ宮」「四七 総角」「四八 早蕨」「五三 手習」「五四 夢浮はし」の五帖の以下の異文である。

- |    |      |                       |
|----|------|-----------------------|
| 四二 | にほふ宮 | [1] なかめ↑↓ながめ給ひ        |
|    |      | [3] 御心を↑↓御心           |
| 四七 | 総角   | [2] まとひぬへきを↑↓まとひぬへきをと |
| 四八 | 早蕨   | [7] かきける↑↓かきたる        |
| 五三 | 手習   | [12] しめりやかなり↑↓しめりやかなり |
| 五四 | 夢浮はし | [8] 人めには↑↓人めは         |

「絵所」は、『源氏物語』諸本と比較すると、尊敬語「給ふ」や助詞「と」を欠く一方、助詞「を」「に」を付加した本文になっている。また、助動詞「けり」と「たり」との異同は、仮名「た(多)」と「け(介)」と字体の類似に拠るものであろうか。形容動詞「しめりやかなり」の二文字目の後に「り」を挿入した「しめりやかなり」という語も、他例を見出しにくいであろう。いずれの異文も、「絵所」書写時の誤写の可能性が通底しているようである。

その一方で、「絵所」には、青表紙本系統と一致する帖もある。

四四 たけかは

【校異1】「湖月抄」下1287-12 / 「7」月にはへ↑月ばえ

【校異2】「7」月にはへ〓〈青〉肖柏本↑月ばえは

「四四 たけかは」では、『湖月抄』に「月ばえ」とある箇所を、「絵所」では「月にはへ」とするが、これに一致する本文は、唯一、青表紙本系統の肖柏本である。

また、別本と一致する帖もある。「四三 紅梅」において、「絵所」は、他本と比べると、尊敬語「給ふ」を欠いた本文になっている。それが、別本の保坂本・国冬本・飯島本と一致するのである。

四三 紅梅

【校異1】「5」まいりぬ↑まゐり給ひぬ

【校異2】「5」まいりぬ〓〈別〉保坂本・国冬本・飯島本↑まいりたまひぬ

『源氏物語』諸本との比較において、「絵所」が尊敬語「給ふ」を欠く箇所は、前述の「四二 にほふ宮」にも見られるところである。

さらに、河内本系統・別本と一致する異文が存するのが、「五〇 あつまや」である。

五〇 あつまや

【校異1】「4」うちわらひ↑うちはらひ

【校異2】「4」うちわらひ〓〈河〉前田家本、〈別〉御物本・高松

宮家本・池田本・国冬本↑うちはらひ ※全文一致伝本・〈河〉前田家本

この本文異同は、これまで取り上げてきた用例とは異なり、いわゆる語句の異同ではなく、ハ行転呼音に起因する「は」と「わ」との表記の異同とも解することができそうな箇所である。だが、「大成」を見ると、「絵所」と同じく「うちわらひ」という本文を持つ伝本として、河内本系統では前田家本があり、他にも別本に、御物本・高松宮家本・池田本・国冬本といった複数の本を挙げることができる。

物語は、薫が浮舟の隠れ家を訪問する場面で、薫が雨のしずくを「うち払」うと、芳しい香が風に乗って強く薫るところである。それを、「うち笑ひ」という語として解したとすれば、雨のしずくに濡れながら長い間待たされた薫が苦笑いしたということになるか。もともと、その直後に強い香が薫ったというのであるから、やはり「うち払ひ」という本文の方が妥当であろうが、『源氏物語』本文に生じたひとつの異文と、その解釈の可能性として押さえておきたい。また、「絵所」の本帖の本文が、河内本系統の前田家本に全文が一致することにも留意される。

なお、「絵所」と『湖月抄』との間の異文のうち、『湖月抄』の独自異文と見られる箇所がある。

四五 橋姫

【校異1】「2」すたれをみしかく↑すだれをすこしみじかく

この箇所は、「すいがいの戸を、すしおしあけてみたまへば、月をか  
しきほどにきりわたれるをながめて、」に続く部分であり、直前の「す  
こし」という語が、目移りで当該箇所にも記載されることになった可能  
性は指摘しておいてよいだろう。

では、「絵所」本文と全文一致する『源氏物語』伝本を一覧しておこう。  
このうち、帖数を□で囲んだ帖は、『湖月抄』と全文一致というこ  
とで、すでに指摘している。

## 四五 橋姫

〈青〉 肖柏本、〈河〉 尾州家本・大島本・鳳来寺本

## 四九 やとり木

〈青〉 大島本（底本）・横山本・池田本・肖柏本・三條西家本、〈河〉  
御物本・七毫源氏・尾州家本・平瀬本・鳳来寺本・大島本、〈別〉  
高松宮家本・陽明家本・保坂本・阿里莫本・桃園文庫蔵本

## 五〇 あつまや

〈河〉 前田家本

## 五一 うき船

〈青〉 池田本・横山本・平瀬本・肖柏本・三條西家本

## 五二 かけろふ

〈青〉 大島本

青表紙本系統では、「四五 橋姫」「四九 やとり木」「五一 うき船」  
に見られる肖柏本が注目されるが、唯一の伝本として、「五〇 あつま  
や」の河内本系統前田家本や、「五二 かけろふ」の青表紙本系統大島

本が挙げられる。「絵所」の本文は帖ごとに長短があり、これによつて  
も異文の生じやすさが変わるかもしれないが、まずはこれらの点に注意  
しておく必要があるろう。

では次に、「絵所」の本文が指し示すと考えられる図柄について、承  
応三年（一六五四）版『源氏物語』（以下「承応版」）を参看しながら推  
定してみよう。

|    |     |       |                    |
|----|-----|-------|--------------------|
| 四二 | 匂宮  | [全1図] | 第1図に該当             |
| 四三 | 紅梅  | [全1図] | 第1図に該当             |
| 四四 | 竹河  | [全5図] | 第5図に該当             |
| 四五 | 橋姫  | [全5図] | 内見開き1図 第2図（見開き）に該当 |
| 四六 | 椎本  | [全5図] | 第3図に該当             |
| 四七 | 総角  | [全8図] | 内見開き1図 第2図に該当      |
| 四八 | 早蕨  | [全3図] | 内見開き1図 第1図に該当      |
| 四九 | 宿木  | [全9図] | 内見開き1図 第6図に該当      |
| 五〇 | 東屋  | [全7図] | 第6図に該当             |
| 五一 | 浮舟  | [全8図] | 内見開き1図 第8図（見開き）に該当 |
| 五二 | 蜻蛉  | [全6図] | 第6図に該当             |
| 五三 | 手習  | [全6図] | 第2図に該当             |
| 五四 | 夢浮橋 | [全3図] | 第3図に該当             |

このように、本稿で取り上げた匂宮巻から夢浮橋巻においては、「絵所」  
本文の示す図柄は、「承応版」の挿絵のうちのいずれかに該当するもの  
と考えられる。そして、多くの場合、挿絵直前の本文を「絵所」は引用

している（帖数を□で囲んだ帖）。その他の帖も、「絵所」の引用本文の数行後に挿絵が入る。

「承応版」のような絵入り物語の挿絵の挿入場所は、該当する本文付近、基本的にはやはり直後であろう。そうすると、「絵所」の物語本文の引用は、帖ごとの図柄を想像以上に具体的に指示しているのかもしれない。もともと、「絵所」には、「承応版」の挿絵にない本文の引用もある（二一 少女」「二八 野分」「二九 御幸」「三五 わかな下」「四〇 御のり」「四一 まほろし」の六帖）ことから、「承応版」のみに拠ったと想定することはできないが、「絵所」書写当時、源氏文化の根底に流れていた源氏絵の類型を垣間見ることはできるであろう。

古典文学の絵画化については、より広範な視野で、その類型化を調査・分析する必要がある。「絵所」についての一連の資料紹介は本稿で終えるが、これが『源氏物語』の絵画化研究の一助になれば幸いである。

## 附記

本稿は、同志社大学文化情報学研究科における二〇二〇年度春学期の授業「日本古典文学情報特論1」の内容の一部である。松本尋弥（匂宮・椎本・東屋）、小原菜々子（紅梅・総角・浮舟）、関あかり（竹河・早蕨・蜻蛉）、薛堰之（橋姫・宿木・手習）が、それぞれ各巻の演習を担当した。その後、これに夢浮橋巻を加え、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究（二〇一九～二〇二二年度）、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教

材への活用」（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二三年度）の一環として、さらに検討を加えた。